

岡山県医師会女医部会報

INDEX

- p1 令和6年度女性医師支援・ドクターバンク連携中国四国ブロック会議
- p2 令和6年度岡山県医師会勤務医・女医部会合同講演会
- p3 第7回天晴れおかやま女性医師リーダー養成ワークショップ
ー ゆっくりでも良い、指導医になろう ー
- p4 「第43回山陽女子ロードレース大会」の報告

令和6年度女性医師支援・ドクターバンク連携中国四国ブロック会議

岡山県医師会女医部会部会長 渡邊 恭子



松山正春会長

令和6年11月4日（月・休）岡山県医師会館にて女性医師支援・ドクターバンク連携中国四国ブロック会議が開かれ、松山正春岡山県医師会会長からの開会挨拶がありました。

角田徹日本医師会副会長からは、4月に「医師の働き方改革」が施行されたことにより、時間外や休日労働の削減、職場環境の整備に対する意識の変化や、各地域内での医師バンクや、女性医師支援への取り組みの報告や「働き方改革施行を受けて」の情報交換等、女性医師はもちろん男性医師さらに“シニア医師”の活躍に期待し就業支援するとご挨拶がありました。



日本医師会
角田徹副会長

(1) 日本医師会女性医師支援センターからの報告事項について（松岡かおり常任理事）

活動方針は、パートタイム勤務などの女性医師等がライフステージに応じて働くことのできる柔軟な勤務形態やキャリア形成をめざし、医師確保対策に資することを目的に女性医師バンク事業、キャリアパス、再就業講習会事

業が主要な事業である。

女性医師バンク事業の登録状況は、医師登録数4,308名、求職登録者数511名、施設登録数7,032件、求人登録件数常勤・非常勤1,919件である。前年度以降新たな活動内容は、女性医師バンクと①ハローワークとの連携、②都道府県医師会ドクターバンクとの連携、③50代医師の将来のキャリアプランに関する調査である。

令和3年度医学部入学者の女性の割合は41.1%で女性医師は増える見込みであり、従来の女性医師支援に「医師の働き方改革」を加え「医療機関・医師会の整備体制」「柔軟な勤務体制」「復帰時研修」「チーム医療体制」「院内保育の充実」「シニア医師の就業拡大」「働き方のデザイン」を検討している。

(2) 各県医師会における取り組み報告

①ドクターバンクの取り組み：成立件数一広島県9件、山口県0件、徳島県46件（ワクチン接種、イベント等）、愛媛県8件、他の県0件。

②女性医師支援について：行政や大学・医師会との連携をはかり、香川県、島根県、高知県もそれぞれ休暇や時短勤務、当直免除、保育サポーター支援を充実させており、また各県のアピールとして



鳥取県（しろうさぎ通信・JOY!しろうさぎ大賞）
広島県（「広島三本の矢」支援チーム）、岡山
県（「天晴れおかやま女性医師リーダー養成ワー
クショップ」、「天晴れジョイボスアワード」）、愛
媛県（おイネ賞事業、マドンナドクタープロジェク
ト）等があり、徳島県からは、面積あたりの医
師数41位とのことで徳島県外出身の徳島医大



懇親会

生へ「一時金支援制度」
を創設し、初期研修開
始時に100万円、専門
研修を行う場合さらに
200万円を支給している。

またサーフィン専門雑誌に求人広告を出すなど新
たな取り組みをされていたのが印象的でした。

令和6年度岡山県医師会勤務医・女医部会合同講演会

岡山県医師会女医部会委員 坂口 紀子

令和6年度岡山県医師会勤務医・女医部会合同講
演会が、令和6年11月30日（土）に開かれました。勤務
医部会は合地明部会長から令和5年度事業報告と令和
6年度事業計画が、女医部会からは、令和5年度事業
報告①女医部会委員会（2回/年）、②医師の勤務環
境改善ワークショップ、③ピンクリボン運動、④山陽女子
ロードレース救護班、⑤地域における女性医師支援懇談
会、⑥女性の健康週間県民公開講座、⑦女医部会報
の発行、女性医師復職支援事業として、環境整備事業
関係者会議並びに女性医師等支援会議（1回/年）、⑧
天晴れジョイボスアワード、天晴れおかやま女性医師リー
ダー養成ワークショップ等、また令和6年度の事業計画を
報告いたしました。

講演は「医師人生に万歳!!～女性でよかった～」と
題して福岡県医師会理事／JCHO久留米総合病院
名誉院長の田中眞紀先生にご講演いただき、日本の人
口減少と労働力不足に触れ、医療現場においても同様
の問題が深刻化すると指摘されました。ワークライフバラ
ンスの重要性に言及し、男女共同参画社会基本法
（1999年）や女性活躍推進法（2016年）の制定にもか
かわらず、日本のジェンダーギャップ指数は依然として低
い状況にあり、特に経済分野や政治分野での遅れが目
立ち、医療界においても女性医師の管理職割合が低い
現状が示されました。

女性医師が働きやすい環境を整備することの重要性が
強調され、福岡県における県と医師会、大学が連携し
た女性医師支援の取り組み事例が紹介されました。高
校生を対象としたキャリア支援事業などが有効であると述

べられています。

ご自身の経験として、外科医を目指
した頃の困難や、出産・育児と仕事の
両立における苦労が語られました。周
囲の理解が得られにくい状況の中で、
自己の能力向上に努め、資格取得など
を通して客観的な評価を得ることが重要であったと振り返
られています。また、女性医師である特性を生かし、ニー
ズの高い乳腺外科に進んだ経緯や、チーム医療の推進、
自由な意見交換ができる職場環境づくりへの尽力が紹介
されました。管理職としての経験から、職員一人ひとりが
成長できる病院を目指し、救急告示病院の設立や放射
線治療の導入などを行ったことが述べられました。



田中眞紀先生

医師の働き方改革についても触れられ、時間外労働
の管理、年次有給休暇の取得、当直体制の見直しなど、
具体的な取り組みが紹介されました。医師事務補助者
の配置や、薬剤師、看護師との業務分担の推進により、
医師の負担軽減を図っていることが説明されました。特
に、薬剤師による処方箋のチェック（プレアボイド報告）
の活用が医療安全に貢献していると強調されました。

最後に、女性医師がお互いを支え合い、上司や同僚
とのコミュニケーションを密にすることが働きやすい環境
づくりに繋がると述べられました。出産後の職場復帰の
難しさや、子どもの病気時の対応など、女性医師特有
の悩みに理解を示すことの重要性が訴えられました。女
性医師の増加が見込まれる日本において、その処遇支
援はすべての医師が働きやすい職場環境の改善に繋が
ると締めくくられました。

第7回天晴れおかやま女性医師リーダー養成ワークショップ — ゆっくりでも良い、指導医になろう —

岡山大学病院 ダイバーシティ推進センター 藤井 智香子



2024年12月15日（日）に第7回天晴れおかやま女性医師リーダー養成ワークショップ—ゆっくりでも良い、指導医になろう—が開催されました。昨年に引き続き、現地およびオンラインのハイブリッド開催となり、多くの方が様々な地域から参加されました。

今年の天晴れジョイボスアワード大賞は岡山大学学術研究院医歯薬学域地域医療人材育成講座教授 小川弘子先生が受賞され、「みんなを少しでもハッピーにできるリーダーであるために—地域医療教育×地域枠制度×リーダーシップ—」と題してご講演くださいまし



小川弘子先生

た。小川先生は内科医、研究者としてご自身のキャリアを積まれたのち、岡山大学学術研究院医療人材育成講座で医療教育、地域枠学生・卒業生のサポートに従事されています。地域医療と医学生・医師の懸け橋となられており、医学知識やキャリア教育のみならず心理面のサポートなども行っておられます。その中で、「サーバントリーダーシップ」を学ばれ、「メンバーの力を引き出す」ことで、医学生や卒業生が持つ強みや可能性を引き出すサポート方法について紹介してくださいました。小川先生の「医学生や卒業生が成長し、医療に貢献してくれることが励みになっています」というお言葉にとっても感銘を受けました。奨励賞は3名の先生方が受賞されました。川崎医科大学麻酔・集中治療医学講師 作田由香先生は「自分にできることを少しずつ」と題してご講演いただきました。ご自身のキャリア

と子育ての両立法について紹介してくださいるとともに、川崎医科大学病院で実施された女性医師のアンケート結果をふまえながら女性医師の指導・サポート体制の展望についてもお話してくださいました。地方独立行政法



作田由香先生

人岡山市総合医療センター岡山市立市民病院消化器

内科部長 湧田暁子先生からは

「肝臓内科医として歩いてきて」と題してご講演いただきました。ご家族の転勤によって長距離通勤しながらキャリアを継続したエピソードをお話してくださいました。「指導医であることは



湧田暁子先生

自分を成長させる」というお言葉が印象的でした。岡山済生会総合病院 上席診療部長 成田亜希子先生には「緑内障スペシャリストへの道 The Journey」と題してお話いただきました。成田先生は海外への研修や学会発表を継続されており、とても刺激的なお話でした。若手医師が主体的に成長できる場を提供する、ロールモデルとしての自覚をもつという方針で実施されている若手医師への指導体制が非常に参考になりました。



成田亜希子先生

最後に世界保健機関本部（WHO）に赴任中の中谷祐貴子先生よりフランス・リヨンからオンラインで講評を賜り、盛会のうちに終了しました。

どの先生もご自身の体験のみならず、若手医師の支援やサポートについてのお話もして下さり、指導医としての想いを伝えてくださいました。まさに若い先生のロールモデルである先生方のお話だと感じました。この場をお借りして、受賞された先生方や、ご参加いただいた先生方、多職種のスタッフの皆様には深謝申し上げます。女性医師が指導医を目指し、自身のキャリアを形成することを支援するという素晴らしいこの会の理念が今後も益々発展し、続いていくことを祈念しております。

「第43回山陽女子ロードレース大会」の報告

岡山県医師会女医部会委員 坂口 紀子

2024年12月15日（日）、旧：シティライトスタジアム（現：JFE 晴れの国スタジアム 同市北区いずみ町）を発着点に「有森裕子杯ハーフマラソン」「人見絹枝杯10kmロード」の2部門で競技が行われました。これまで女医部会からは4～6名の部会委員が会場に赴いて救護を行い、また子宮がん・乳がんの検診勧奨チラシを配布してきました。今年からは広く岡山県医師会会員に呼びかけ、救護応援者を募りました。当日は、岡山県医師会より山上洋治先生（まにわ整形外科クリニック）、藤本晃充先生（川崎医科大学救急医学教室）、金重恵美子先生（セントラル・クリニック伊島）と筆者・坂口紀子（岡山市立市民病院）がボランティア参加しました。ハーフマラソンが10時スタート、10kmロードが10時15分スタートなので、私たちは9時にスタジアム内の救護室に参集しました。例年通り、医師会の緑のジャンパーを身に着け、各レースの最後尾に付く救護車両にはMEDICAL STAFFのビブスを着用した山上先生と藤本先生が乗車し、坂口は救護室に残りました。金重先生は「おかやまの女性ランナーを支援する会」のメンバーでもあるので、表彰式で入賞者に記念品の授与なども担当されていました。

大会の参加資格として、日本陸連登録競技者の規定がありますので、日頃から練習を重ねた選手たちではありますが、当日の選手の体調や気象条件などで、どうしても救護の必要な方は発生します。幸い、今年も大きな故障者やけが人はいませんでしたが、膝関節痛の方、低体温症の方などがいらっしゃり、医師会としての協力はできたと思います。初参加の山上先生、藤本先生からは「レースが多くの人たちの協力に支えられていることが、改めて分かった」「選手としてマラソン参加することがあるが、救護車に乗って、沿道の景色がまた違って見えた」との感想をいただきました。来年も医師会からの救護応援ができればと思いますので、その際はどうぞよろしくお願いいたします。



左から、藤本晃充先生、山上洋治先生、坂口紀子先生、金重恵美子先生

編集 後記

今年は、立春過ぎから寒さが厳しくなってきたように思いました。我が家にある枝垂桜の開花もいつもの年より遅くなりました。3月末の少し暖かくなった朝つばみが一つ、二つ開いたなと思った日の夕方には八分咲きの状態になり、遅れた時を取り戻すかのように満開へと駆け足になったように感じました。また、周囲の山々も数日前に比べると盛り上がったように見え、木々の芽吹き速さにも驚かされます。植物は、春に命の再生を取り戻していきますが、私は年々老化現象を実感する毎日です。あと何度満開の桜の春を迎えられるかしんみり思う反面、いつまで現役の医師として働けるか、否、働かねばならぬかと思う毎日です。

岡山県医師会女医部会も会報が39号となり、年2回発行するものですから、20年近くが経過しようとしています。女性医師の働き方も、変化してきたのではないのでしょうか。

古稀過ぎの私が医学部を卒業した頃は、女子学生はクラスに1割程度でしたが最近では半数近くまで増えているそうです。

女性医師は、日本の医療を支えるために不可欠な存在となっています。しかし、女性医師の管理職割合はまだまだ低く、女性医師が働きやすい環境を整備することは重要であることが叫ばれています。女性医師の特徴としての、結婚・出産・育児のハードルは依然高いと思いますが、今活躍している先輩たちは、後に続く若い女性医師達に働きやすい環境づくりを提案し実践してこられました。素晴らしいことです。

「若い女性医師達よ、お互いに支え合い、天職である医師としての人生を全う出来るように、我々女性医師が日本の医療を支えている誇りをもって頑張ってください!!」とエールを送りたい気分になる今年の春です。

浅口医師会 新津 純子